

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 376



2003 MARCH



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2004年H A Jサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2004年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：H A Jの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しない。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャバンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2004年7月22日～8月27日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切り：定員になり次第
6. その他：H A Jの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

七千メートル峰の「未踏峰」も数少なくなった。ブータンと中国の国境にある「ガンカル・プンスム(7,590m)」、「トンシャンジャブー(7,207m)」、ブータンの「テリ・カン(7,125m)」が注目されているが、ネパールと中国の「フンチ・ギュバ・ツォモツェ(7,036m)」でも熱い闘いがくりひろげられている。ネパール側のフンチ。(文：山森欣一、写真：野沢井歩)

ヒマラヤ No.376

1. アルナチャル北東部奥地の旅 沖 允人
12. 第24回 インド・ヒマラヤ会議報告
18. パキスタン登山隊リスト2002年
20. ネパール山岳協会が扱うトレッキング許可ピーク区分と新ルールについて
21. ヒマラヤ・ニュース(地域ニュース・トピックス)
22. H A Jニンチン・カンサトレッキング隊員募集
24. 寸感・事務局日誌

アルナチャル北東部奥地の旅

期間：2002年12月23日～2003年1月4日

沖 允人

■概要

北と北東を中国、西をブータン、南東をミャンマー、南をバングラディッシュに囲まれたインド北東部辺境地帯には、セブン・シスターズと呼ばれる7つの州がある。アルナチャル・プラディーシュ（以下、アルナチャルと略記）、アッサム、マニプール、メガラヤ、ミゾラム、ナガランド、トリプラである。これらのうちプラマプトラ川の北、アッサム・ヒマラヤの山岳地帯とその南山麓に広がるアルナチャルには約25種族の山岳民族が住んでいるが、交通が不便なこともあって訪れる外国人は少ない。

1998年1月のアルナチャル南部のカメン（East & West Kameng）地区、1999年1月の中央部

のスパンシリ（Upper & Lower Subansiri）地区およびシアン（Sian）地区の探査に続いて（それぞれ、「ヒマラヤ」1998年5月318号、2000年6月343号参照）今回、沖允人・道子、増田秀穂・歳子の4名は北東部のディバン・ヴァレイ（Dibang Valley）地区奥地の探査を行った。

インド政府は、インド北東部の中国との国境地帯には厳しい警戒体勢を敷いており、また、プラマプトラ川南部の各州は民族独立運動や経済不安などのためのテロが横行していて、危険地帯となっている。そのため、この地域への入域を制限していて、地域・期間・人数等を限定した特別許可の取得を必須としている。この事情は昨年春頃からやや緩和されているが基本的には変わっていない。



■探査コース概要

アッサムのゴーハティ(Guwahati)を12月23日に車で出発し、アルナチャルの州都であるイタナガル(Itanagar)に行き、そこから東シアン地区のパンガート(Pashighat)、ディバン・ヴァレイ地区のロイン(Roing)と北上し、さらに奥にあるアニニ(Anini)の村まで、一気に車を走らせた。アニニで3日間滞在し、その間、アニニの北奥にある村々を訪ねた。

帰路は、ロインからサディヤ(Sadiya)に出て、ブラマプトラ川をフェリーで渡り、車でディブルガール(Dibrugarh)、シロン(Shillong)を経由してゴーハティに帰着した。13日間の旅であった。

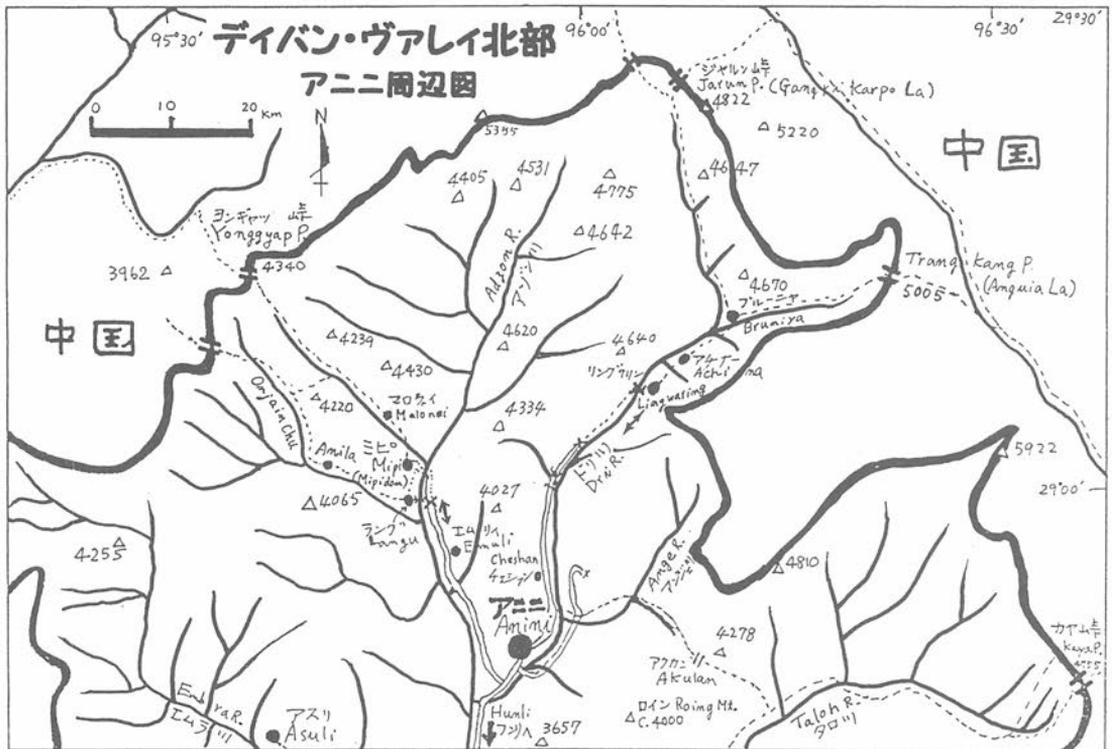
なお、正確な地形図の入手ができないので、地名や標高・位置はおおよそのものであることを了承されたい。

■行動記録

荷物輸送のトラックとアルナチャル各地を結ぶ長距離バスが多くなったこと、特に、リクライニングシート付きのいわゆるデラックス夜行バスの

便数が多くなったくらいで、道路事情、旅行事情、人々の生活状態、周辺の風景などは、以前と比較してあまり変わっていなかった。したがって、パンガートあたりまでは、前回までの記録を参照していただくとして、本報告ではロインから先に重点をおいて記述する。

また、2000年9月下旬からディバン川(Dibang)支流のエラム川に東京農業大学農友会探検部の4人(石井邦彦、大津広策、風間信行、国岡陽太)が沢登りなどのために入り、アテリ村(Atili)の先のアニュ沢(Anyo)の探査をし、最奥の集落であるアスリ(Asuli)まで達して「アルナチャル深部へ」と題した行動概要が「ヒマラヤ」2002年5月354号に寄稿されているので参考にされるとよい。2002年4月にも同隊は、アニニからディバン川上流のマツン川(Mathun)の上流にあるミピ(Mipi)の集落、そして、最奥のエバリ(Ebali)の集落などに入り、約2週間の調査を実施している(<http://page.freett.com/arunachal/>による報告を参照されたい)。



■アルナチャルの州都イタナガルへ

12月23日、ニュー・デリーから空路でゴーハティへ着き、外国人登録を済ませ、翌24日は資料収集とアルナチャルのガイドと打ち合せをした。入域許可料として1人50ドル、1日当りの宿泊・交通・食事・ガイドの費用として1人100ドルを支払った。ホテルらしいホテルは皆無の辺地旅行の費用としてはアルナチャル州政府規定の料金とはいえ、かなりの高額である。

その日はゴーハティの市内を散策し、有名なヒンドゥ教のカマキャ寺院と州立博物館を見学した。

25日、ゴーハティからイタナガルへの約400kmの旅を開始した。曇りで、時々日がさしていた。アルナチャル滞在中は同じような天気が続いた。

途中、軍隊のトラックが延々と列をなして左横を通り過ぎて行った。

アッサムからアルナチャルに入る州境のチェックポストを日が暮れかかる頃に通り、午後7時にイタナガルの町に着き、アルナチャル・ホテルにチェックインした。

■バシガートへ

26日、午前8時半に出発し、国道52号線を北東に走る。直接、バシガートに行く道はないので、一旦、アッサムに出て、迂回して、再びアルナチャルに入ることになる。

午後2時頃、橋の無い川に着いた。橋はないが鉄道の鉄橋があり、これを渡るという。この無鉄砲さには驚いたが、運転手は慣れたもので、ガタガタ音をさせて難なく渡った。渡りきったところに踏み切り番の小屋があった。列車は1日3回通るだけなので、空いている時間に車の通行を許可しているのだという。鉄橋の終わった所から道路が鉄道から右へと、当たり前のように始まっていた。

午後3時、アルナチャルに入る地点のラスキン(Ruskin)の町に着く。ラスキンのチェック・ポストでの審査は相変わらず時間がかかったが、私たちが慣れたせいも、また、町が豊かで平穏になったせいも以前ほど緊張感がなかった。

バシガートは東シアン地区の中心でシアン川(ブラマプトラ川)の岸にある。近くには野生動物園があり、ハイキングコースや川下りも楽しめる。

位置は北緯28度1分・東経95度20分で、沖縄の名瀬市と、ほぼ、同じ緯度である。

標高260mのバシガートのホテル・イーストに着いた頃、すでに夕暮れが迫っていたが、夕食までに充分時間があつたので近くのバザールを見学する。生活用品や野菜・果物類は大抵そろっている。ミカンや山と積んで売っているガロン(Garon)族の女性が目立った。

■バシガートからロインへ

27日、午前6時には明るくなった。少し風があり、ホテルの窓から見えるバナナの葉が揺れている。寒いくらいである。時計に組み込まれた温度計は5度を示していた。

午前8時半にバシガートを出発し、9時半頃にフェリーでシアン川(Sian)を渡る。15分ほどで対岸に着く。背の高いススキが生えている。ガイドの話だと、実際にこちらあたりには虎や豹が出没するという。たしかに虎が出てきそうな雰囲気である。しばらくで、森林帯に入る。

今日は、このあと、シスリ川(Sisuri)とディハン川(Dihan)という大きな川を渡るのだが、どちらの川にも橋はない。ロインまで約120kmある。

午前10時頃、アディ族の集落を通りかかったので、休憩をかねて見学する。400人くらいが住んでいる。村人が大勢出てきた。家の中を見せてもらったり、写真をとったりと、賑やかな交流となった。途中に、イルー(Ilu)へ8kmの標識がある。

11時頃、支流に架かる長い鉄の橋を渡る。川には水はなく、石ころばかりである。10分ほど走る



▲ロインのホテル前のメンバーとスタッフ

▼イドゥ族の女性たち



と、先刻渡った橋よりさらに長い鉄の橋を渡る。ここにも水はない。小さな集落が点々とある。次の支流にはコンクリートの橋が架っている。

12時、山道が土砂崩れで通行不能になっている地点に出た。別の道を教えられ、引き返して川底のような迂回路を走る。

しばらく河原の中を走ると、再び、急流の川に出たがここにはフェリーはなく、手作りの粗末な竹の橋が架けてあり、小型車のみ通過できる。番人がある有料橋で、車1台が100ルピーである。竹製の橋は小さな中州を間に二つあり、川幅は狭いがかなり流れは速い。ベテランドライバーでないと通り抜けられない不安定で粗末な橋である。

しばらく走ると水量の多いディハン川に出た。上流に山が見えている。川幅は200mほどあり、ここもフェリーで渡った。そしてまた、河原の中を走り、小沢を5つほど渡るが、いずれも水はなく、上流からかなりの量の土石が流れてきている。雨期の豪雨による濁流のすごさが想像できる。

やがて、鬱蒼とした森林の中を走るようになり、野性のバナナ、ニッパヤシなどが茂っている。

最後に長い鉄の橋を渡り、午後4時にロインのミム・ホテル(Hotel Mimu)に到着した。ロインの位置は北緯28度6分・東経95度46分である。このホテルにはレストランがないので近くのレストランでチベット風のラーメンと焼きそばにビールの遅い昼食をとった。

ロインには、ディバン・ヴァレイ地区の地方区(Sub Division)の地方事務所(Head Quater)がある。近くにアルナチャルの最も古い考古学的な

所であるビスマクナガル(Bhismaknagar)の遺跡がある。この地名はビスマカ(Bhismaka)という王様の名前に由来している。美しい娘のラクシミン(Rukmini)が近くの王子シスプサル(Sisupal)と戦い、シスプサルが負けたため、耳から下の毛を剃り落としたという伝説があり、その人達がイドゥ(Idu)族の先祖だといわれている。

夕食までの時間に、バザールを見学した。生の魚、干した魚、ミカン、バナナ、パイナップル、野菜などがいろいろある。夕食はコックたちが、別棟にある炊事場を借りて作り、倉庫のような建物で食べた。メニューは、私たちが教えてインド米を二度炊いて作ったお粥らしきものに、野菜カレー、グリーンピースとカリフラワーをゆでたもの、ダル・スープ、紅茶、それにミカンである。今回の旅行中、ほとんど同じメニューで、肉は一度も出なかった。

■ロインからフンリへ

28日、今日は最後の宿泊地であるアニニに行く日である。ロインからアニニまで223kmほどあるので早く出発したかったが、朝食の準備に手間取りロインを午前8時30分に出発した。

長い鉄の橋を渡り、続いて枝谷であるイピ・パニ(Ipi Pani)に架かる小さい鉄の橋を渡り、5kmほどパンガートのほうへ戻り、途中で右に折れて北へ向かう。ハリ(Hari)、マヨディヤ(Mayodiy a)、テワリ・ガオン(Thewari Gaon,1310m)の村々を通過する。

しばらくして小雨が降ってきた。道はだんだん登り坂になる。空には黒い雲が広がり天気は良くない。そのうち小雨は雪に変わった。寒い。30分ほど登ると道端に雪が積もっているのが見られるようになった。10時15分、ガスの中に突然白い建物が現れた。それはヒンドゥ教の小さなお寺で、その反対側に、黄色の標識があり、マヤオドヤ峠(Mayaodya Pass, 2655m)と名前と標高が記されている。3000mに近いのだから寒いはずである。雪は先日のものらしく、10cmほど積もっていたが幸いに道路脇に残っている程度であった。

11時にガール(G・B・Garh)を通過する。広々とした台地が見えてきた。フンリ(Hunli)の村である。



フンリは小高い丘の中腹に広がった村で、軍隊の駐屯地やホテルや小学校がある。

軍隊の駐屯地の入り口にある茶店でインド製のインスタントラーメンとゆで卵などの昼食を食べた。昨夜、ロインのケーキ屋で買った小さいマフィンがうまい。ミカンは沢山購入してあるので気にしないで沢山食べられて嬉しいが、残念ながら種が多い。バナナも買ってきたが青臭い。

フンリの標高は1150mである。ロインから90km、アニニまで138kmと記した標識がある。ロインから3時間かかったので時速30kmほどで走行したことになる。このぶんどとアニニまで最低5時間はかかりそうである。

■最後の村アニニへ

フンリからは山の斜面を削って作った道になり、右側は急な崖になっている。フンリから遥か下に見えるディバン川にどんどん下って行くのだが、「日光いろは坂」を10倍にしたような急なジグザクの道が長く続く。下るにつれてだんだん暑くなる。川に近くなったところで道は緩い傾斜になり、橋を渡ってディバン川の上流であるドリ川(Dri)に沿って北へ登りながら進む。

1時間ほどで、大きく切れ込んだ谷を回り込んでアルズー(Arzu)の村を通過し、さらに1時間で着いたイタリン(Etalin)の村あたりで暗くなってしまった。イタリンはタロ川(Talho)とドリ川の合流点の村で、この下流に農大隊が探査したエムラ川が合流している。



マラヤニ(Malayani)という集落を通過し、アニニには午後7時頃に着いた、アニニの標高は1690mである。サーキット・ハウス(Circuit House)に入る。サーキット・ハウスというのは、政府の役人が出張のときなどに泊まる官舎であるが空いていれば一般人も宿泊できる。公務出張の役人の1泊20ルピーから一般人の300ルピーまで宿泊料金には宿泊する人と目的に応じて細かいランクが付けられている。

大きなラウンジには古ぼけてはいるが立派なソファがある。そして、食堂と炊事室がある。客室は4部屋あり、それぞれ、ベットに蚊帳の付いた寝室・脱衣室兼化粧室・トイレ兼シャワー室が付いている。各々の部屋には、Awa、Matun、Chini、Driと川の名前や村の名前が付けられている。

部屋の前は幅広い廊下になっており、その前の一段下がったところは花や樹木の植えられた広い庭となっている。このハウスは1990年に建設されたイギリス風の建物である。レストランはないので、炊事場でコックが私たちの食事を作ってくれる。久し振りに、広い食堂でゆっくりと夕食を味わった。

■アニニから奥へ

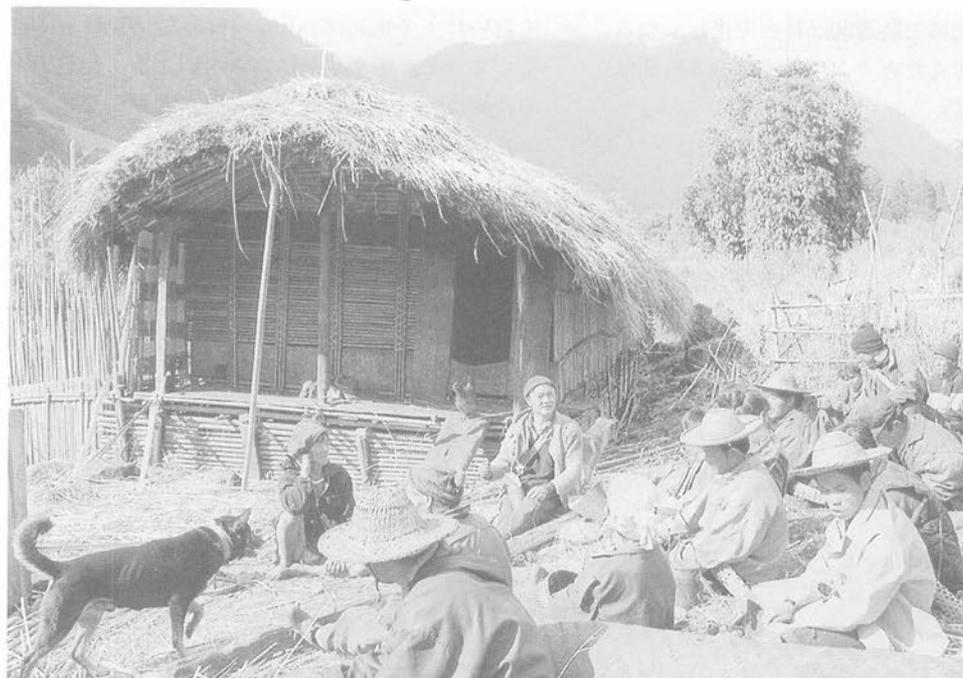
29日、今日はアニニよりもっと奥地の国境に近

い集落を訪れる。アニニからドリ川の右俣(別名アンゼ川、Ange)を人だけが通れる鉄製の吊り橋を渡って14km行くとアリニー(Alinye)の集落があるが、車で行くには下流から遠回りしなければならない。私たちは左俣(ドリ川本流)右岸に建設中の道路を利用してアング(Angu)の集落に向かい、行けるところまで車で行くことにした。

しばらくで川が二俣になっているのがはるか下に見える。両方ともドリ川と呼んでいる。道路は左俣の右岸に付いている。

5kmほど舗装工事の下準備のために、頭くらの大きさの石が敷きつめてあるガタガタ道を進むと車の終点となり、そこから約3kmを歩くことになる。右手奥に雪山が見えている。中国国境に続く山々である。このあたりには虎や鹿が生息し、蚊もいるという。村人には散弾銃を持った人が多く、長さ40cmほどの銃も腰に差している。鉄砲を持っている女性もたまに見かけた。鉄砲は警察に登録しているという。

広い谷を40分ほど歩くとすぐに竹製の吊り橋がある。これを渡る。全長100mくらいあるが幸いに水面まで10cm程度なのでホッとする。しかし、少し揺れ、敷いてある竹が滑るので緊張しながら渡る。



新築中の竹の家と村人

■竹の家を新築中

斜面の中の細い道を10分ほど歩くと大勢の村人が集まっていた。ミシュミ族の住むアングの集落である。竹の家を集落の全員が手伝って新築中であった。丁度、昼飯時で、赤米のご飯、水牛に似たミトゥン(Mithum)という動物の肉の干したものと塩ゆでしたもの、それに、ドブロクに似たユウ(Eyu)という地酒が振る舞われている。ミトゥンはこの地方独特の頑丈な体をした黒に近い鼠色の角をもつ牛で、放し飼いされている。毛は一色ということはなく、白と黒が必ずある。ミトゥンの角は居間の壁の飾り物にする。

村人は、ご馳走や地酒を私たちにも勧めてくれた。肉も地酒もなかなか美味しい。しかし、あまり衛生的ではなさそうである。これらのご馳走は新築する家主が負担するのだという。家は2日間で完成し、今日が2日目で、今夜は完成祝いの祭りがあるという。

竹の家は、長さ30m、幅8mほどあり、高床で竹の箆の子の床、竹の表側と裏側をうまく利用して市松模様のようにきれいに編んで作られた間仕切の壁とすべて竹・竹・竹で作られている。

10畳くらいの日本の田舎にあるような囲炉裏のある居間兼食堂、男性用・女性用・子供・老人用の居室、炊事場、作業場など数部屋がある。この新築の家に住む家族は夫婦と子供4人であり、彼らが食事の接待をしていた。ミシュミ族の家は、一夫多妻として知られているが、実際にはその数は少ないようである。

アングからもう一つ奥にアチナー(Achina)という集落、さらに奥のドリ川上流の二俣地点にブルーニャ(Bruniya)の集落があるという。

1時間ほどアングを見学し、来た道を引き返し、午後2時半に車に帰着した。

途中で大木に寄生している野性のランを採集した。花に詳しい増田さんの話だと、愛好家なら10万円程度で取引されている珍種だという。アルナチャルにはインドにあるランの1000種あまりのうちの500種以上のランがあるという。西カメン地区のティピン(Tipin)の町には、ラン研究所(Orcid Research and Development Station)がある。

車の終点から30分ほど戻ったところにある2000

▼アニニの町と国境へ続く山々



年にできたと記載されている支流にかかるコンクリートとの橋のたもとで昼食にした。甘い味の食パンと果物とゆでたジャガイモが美味しい。

■中国国境地帯

アニニに住んでいる男性が途中から一緒になった。この上流にある中国との国境まで行ったことがあるという。写真を見せてもらった。今年、2002年の9月の第2週にアニニから6日で国境の雪の積もった峠に立ったという。最奥のブルーニャの集落まで3日かかり、そこからドリ川上流の左俣源流に向かい、3日で国境の峠に着いたという。ブルーニャから先には村はなく、比較的広い谷で、花も咲いている。水量も多いが魚はいない。4500m~4900mの山々が谷の両側に聳えている。最後は、かなり急な斜面で、雪の積もったジャルン峠(Jarun Pass、別名Anjankola, Gangrikarpo La)に立つと中国側のナゴン・チュ(Nagong Chu)の谷の上部が望まれたという。その谷には、中国側のスムソン(Sumson)やグタン(Gutang)の集落がある。

なお、ブルーニャからドリ川右俣の源流に向かって進むと5000mを超える国境のトラン・カン峠(Trang Kang Pass、別名Agua La)に達する。

10月下旬までは森林帯に蛭が非常に多く、塩を撒いて撃退するというが、大変のようである。もっとも地元の人には日本人ほど気にしていないようである。

彼は、1999年と2001年にも同じルートで国境まで行ったことがあり、主たる目的は狩りで、こちらあたりには鹿がいるという。

アニニからドリ川支流のアンジェ川(Anje)を3 kmほど詰め、東の尾根に登りアクカン峠(Akukan)を越えてタロー川(Taloh)に出てイタリンからの道に合流し、それを詰めると国境のカヤ峠(Kaya Pass, 4755m)に達する。

■ミビへ

30日、午前6時に起床する。室内の温度は6度で、寒い。しばらくすると明るくなり、朝日が昇ると急激に暖くなる。温度計を見ると22度になっている。晴れていて青空も広がる。洗濯物や毛布をテラスに干す。

屋上からの眺めは良い。雪をかむった山々が見える。近いところにあるのがロイン(Mt.Ring, c. 4000m)という名前でも他の山々は無名峰である。

10時になったので、政府の民芸品の製作販売所(Cottage Industry Empolium)へ寄ってみた。布、竹細工、帽子、絨毯などの製品があるが、種類も品数も少ない。別棟では布を織っていたり、木工細工をしていた。

今日行くミビ(Mipi、別名Mipidon)の集落へのコースは、1913年にイギリスの探検家であるベイリー(F.M.Bailey)とモーズヘッド(C.H.Morshhead)がツァンポー川の探検をした後に滞在し、



▲ブランゴの集落へ帰る親子

▼ブランゴの集落へ向って歩く



国境を越えてチベットへ入ったコースである。その後この周辺に外国人が入った記録は、前記の2002年4月の東京農大隊だけである。

アニニから北へ向かってマツン川(Mathun、別名Adzon)の左岸に沿って走る。昨日、途中からガイドをしてくれた地元の男性が今日も親切に案内してくれる。

アニニの中心から5分ほど先にヘリポートがあり、軍隊の駐屯所もある。その脇を通って行く。

このあたりからアニニの全体が見渡せる。アニニは起伏のある広い丘になっていて約250軒の家があり、5000人ほどが住んでいる。小学校が3つ、中学校と高校と上級高校がそれぞれ1校づつある。教育システムは5・3・2・2年で中学校までは無料、それ以上は教科書代程度である。

一家族は一つの家に住んでいるが、結婚すると別棟を立てたりして独立して生活している。アルナチャルの結婚は、デリーあたりとは逆で、男性側が女性を選び、男性から女性へ贈り物をする。贈り物は現金ではなく、家畜や自動車など物のことが多いという。

アニニから山道を走ると「マロネイ(Malonei)まで42km」の標識がある。しかし、そこまで道路ができていない訳ではなく、建設予定を示す標識である。私たちは道路工事の真っ最中の道を走る。

16kmほどきたところで大きな石が道路を塞いでいる。1時間位待つことになるというので近くにあるマロナリ(Malonali)の集落の民家を訪ねる。自家製の酒をご馳走になる。7人家族だという。

12時20分に道路の補修が終わったので出発する。

しばらくでまた石が落ちている。人夫が5人ほどで鉄棒を使用して石を動かし、谷に落としている。

途中のエムリイ(Emuli)の集落の下で弁当の昼食にする。これまでの昼食メニューにゆでた山芋が加わった。山芋は薄い砂糖味がする。しかし、ジャガイモのほうがうまい。

さらに1時間走ったが極端に道が悪く、走行距離は僅かである。そこから先も道路は続いているが、まだ工事の途中でこれ以上車は走れない。アニニから約30kmの地点である。歩くのも危険なくらいである。時計を見ると午後3時45分であった。車はここまでとし、工事事務所のある手前で駐車し、砂埃の道を歩く。

5分ほどで道路は大きく谷を回り込むが、その地点に急傾斜の踏み後程度の道が谷に直線的に下っている。これを辿って30mほど下ると竹製の吊り橋があり対岸に渡って登り返すとブランゴ(Brango)の集落がある。吊り橋はこの集落への近道である。ブランゴから約3kmでミピの集落に着くという。途中から便乗してきたブランゴの2人の女の子は吊り橋を渡って帰っていった。橋の中央で手を振っているのが夕暮れの中に豆粒のように見えた。私たちが行くとなればブランゴへ行くだけでも片道1時間以上はかかりそうだし、夕闇がせまってきたので、奥地の探査は、ここまででうちきることにした。ミピの北には最奥の集落エバリ(Ebali)がある。

ミピから北東に直線距離で約50kmで国境になる。ミピの上部で2つのルートがあり、それを登りきった国

境地点には、それぞれに峠があり、北にあるのが、ヨンギャップ峠(Yonggyap Pass, 4220m)、南にあるのが、アンドラ峠(Andraoass, c.4000m)である。道ははっきりしないが、これらの峠を越えた所は中国側ではツェンポー川(ブラマブトラ川)の支流の谷に続いている。

引き返した地点の道路工事事務所には土木技術者たちがいた。私たちの車の燃料が乏しいので軽油を分けてもらう。ドラムカンから口で少し吸い出し、ホースを差し込んで携帯用のタンクに入れ、タンクからミネラルウォーターの空きボトルを切って作った即席の漏斗で車に給油する。

午後4時15分に出発したが、しばらくで道路工



◀ブランゴの集落の手前の深い谷に架かる竹の吊り橋

▼ミシュミの男性



事の人が、先行する車を止めて何かを訴えている。この先でつい先ほど大きな土砂崩れが発生し、ブルドーザーがないと道が開けられないのだが、ブルドーザーの燃料と運転手が必要なのでもう一度、先刻の工事事務所にもどってくれという。

私の乗った車1台が戻り、軽油の燃料を積み、事務所で休んでいたブルドーザーの運転手を乗せて現場に急ぐ。私の座席の近くに軽油を積んだので刺激のある臭いが鼻をつく。

土砂崩れ現場に着き、30分ほどかかって土砂を取り除いたが、取り除くあとから何度も崩れてきてなかなかはかどらない。現場にいる人夫は竹で小屋を作り、ここに泊まる準備を開始した。私たちも野宿になるかと心配になってきた。

幸いに、1時間ほどでやっと通れるようになったが暗くなってしまった。難所はこの先にいくつもあるので、祈るような気持ちで、しかし、急い

で走る。幸いに、道路上の大きな石は片付けてあり、なんとか通過できた。アニニまで9kmの標識があり、難所が終わったことを知りほっとする。

それから30分ほど走るとアニニの村の明かりが見えてきた。午後7時すぎにサーキット・ハウスに到着した。無事に帰れたのは、神のお恵みと地元ガイド・運転手・道路工事人たちのお蔭である。

■ロインへ帰る

アニニの最後の日は大晦日だった。空模様はあまり良くない。今日はアニニからロインへ223kmを帰るのだが、途中にある峠の手前が急坂で峠から先も道が悪いので早く出発することにした。午前7時に朝食をビスケットと紅茶で済ませ、玄関前で全員の記念撮影をして出発する。

30分ほどで橋を渡りチナケフル(Chinakeful)、アンボリ(Amboli)、プニ(Puni)などの集落を通過する。途中で小さな発電所がある。

急坂を下ると、来るときには雲が多くて見えなかったが、今日は奥のほうに雪山が見えてくる。かなり高そうである。写真を盛んに撮る。

12時に分岐点があり、シュクナ・ナガ(Shukra Naga)へ29kmの標識がある。私たちは南への本道を走る。そこから28kmでフンリである。

午後2時45分にやっとフンリに着き、茶店でジャガイモとゆで卵などの昼食をとった。アルナチャル州の副大臣の視察とかで政府の車と警察、軍隊の車などが数台きていた。なんだか悪い予感がした。案の定、午後3時半に出発しようとしたところを警察に車を止められた。ガイドが対応したが、どうやら、アニニで情報警察に滞在届をしていなかったことを咎められ、アニニに引き返せといっているらしい。時間がないからと説明していたようだが、許してもらえず、ちょっと来いということになった。ガイドたちが全員警察に行った。いろいろ交渉した結果、アニニに電話で事後報告し、許可証のコピーを渡し、メンバーリストを提出して勘弁してもらえた。午後4時過ぎになってしまった。谷間の冬の早い夕暮れがせまってきて薄暗くなっていた。遠くに見えていた雪山の夕焼けがきれいであったが、それよりも先が心配であった。

峠に、雪は心配していたほど残っておらず、車も順調に走ったが、ジブザグの急坂なのでスピードが出せず、90kmを4時間ほどかかり、ロインに着いたのは午後8時近くであった。

■シロン経由でゴーハティへ

元旦をロインで迎え、ロインからディブルガールまで約60kmを走り、ブラマプトラ川をフェリーで渡り、アルナチャルとアッサムの州境のサイコワ・ガート(Saikoa Ghat)で最後のチェックを受け、ディブルガールに着いた。

翌朝、空港に行ってみるとディブルガールからの航空便の席が航空会社の手違いでとれなく、やむなく深夜の国道を航空会社の手配してくれたタクシーで10時間ほど走ってシロンに着き、1泊した。シロンから車でゴーハティに出て空路ニュー・デリーに1月4日に帰着した。

■おわりに

私が最初にサディヤの村にやっと辿りついた1974年から28年目の今回の旅で、アルナチャルの西

部のタワン地区から東のディバン・ヴァレイ地区まで一通り訪ねたことになる。主な民族には出会ったがまだいくつかの民族には会えないままでいる。また、国境地帯に近づきはしたものの接近できたとはいえない。アルナチャルは地理的にも民族的にも大変魅力のある地域であり、特別許可も、国境地帯でなければ比較的簡単に取得できるようになったし、10日間という滞在期間もそれなりの理由で交渉すれば2ヶ月位まで延長できるようである。最近、軍事施設の多いタワン地区の北辺の国境近くまで行く許可を取得したドイツ人もいるという。したがって、国境近くの知られざる峠や山に登るのも夢ではないような気がする。

電話やファックス、電気もアニニのようなかなり奥の村まで通じている。ゆっくりではあるがアルナチャルは変わりつつある。

しかし、生活は近代化するが、人々が自然と風習を大切にしているのを見ると、チョンマゲのように頭髪を束ねたりする独特の風習、竹造りの民家、カラフルな民族衣装などはアルナチャルから消えてしまわないように思えるし、また、そう願ってもある。

■参考文献

- (1)C.アレン著、宮持優(訳)：チベットの山、カイルスとインド大河の源流を探る、未来社、1988。
- (2)沖允人・編：ヒマラヤの桃源郷、ブータン・シッキム・アッサム、日本ヒマラヤ山岳協会、1975。
- (3)沖允人：アッサムの奥地に入る、1974年1月の記録、岩と雪40号、pp.106～114、山と溪谷社、1975。
- (4)DKD(ed)：General Knowledge on Arunachal Pradesh, Frontier Publishers, Itanagar, Arunachal Pradesh, 2002。
- (5)Tigianal and Gianni Baldizone：Bramaputra, The Tales from the River, Timeless Book, New Delhi, 2000。
- (6)Swbatian Karrotemprel(ed)：The Tribes of Northeast India, Centre for Indigenous Cultures, Shillong, 1998。
- (7)P.Thankappan Nair：Tribes of Arunachal Pradesh, Spectrum Publishers, Guwahati, 1985。
- (8)R.C.Cuta：Arunachal Pradesh, Land of the Sun, S.P.Spectrum, Guwahati, 2001。
- (9)Minimon Laloo：North East General Knowledge, Laler Brothers, Guwahati, 2002。
- (10)B.P.Panduey：Arunachal Pradesh, Villages State to Statehood, Himalayan Publishers, Delhi & Itanagar, 1997。

第24回 インド・ヒマラヤ会議報告

H A J主催による新春恒例のインド・ヒマラヤ会議は、今年24回目となり1月26日（日）東京・池袋の豊島区民センターで行われた。

会議には北海道から愛知県など全国から2002年実施隊や2004年にインド・ヒマラヤへ出掛ける予定の登山隊関係者など40名の参加をみた。

H A Jの酒井國光会長が開会の挨拶を行った。会議では、

9時40分～11時40分「2002年隊登山報告」

登稜会のディオ・ティバ（有川博章氏）、東京登山隊のトレイサ・ガール（川崎浩史氏）、J A Cのパドマナブ（坂井広志氏）についてスライドを交えて報告された。

13時～13時40分「インド登山の実務」

H A J中川裕常務理事から最近のインド・ヒマラヤ登山の現状やそれに対応するための対策の現

状について報告があり、特定の事項については各登山隊の経験者から経験談が披露された。

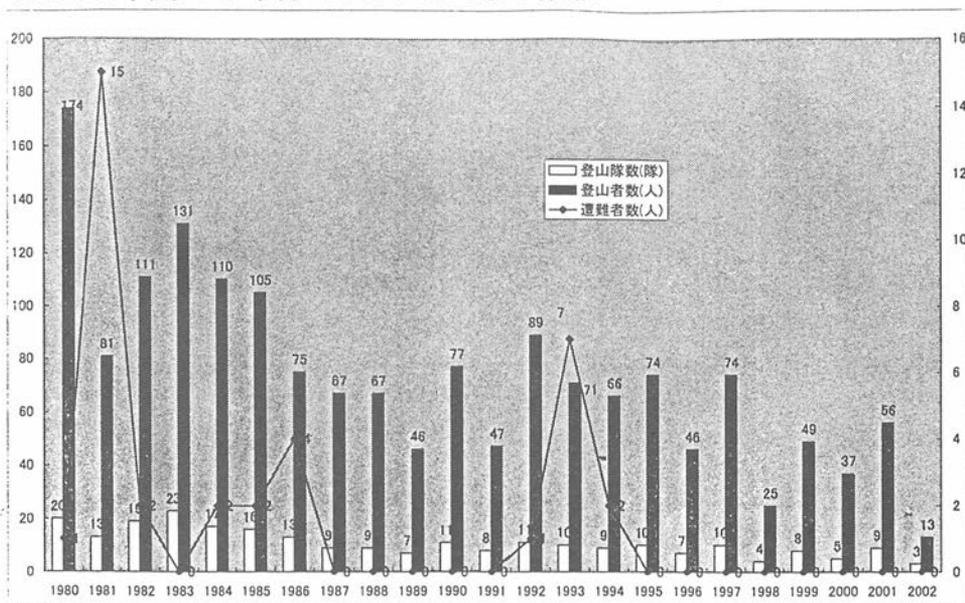
14時～16時15分「インド・ヒマラヤの魅力」

労山元会長でマナリに拠点を構えて活躍中の森田千里氏が、最近のインド情勢について1時間ほどかけて細かく紹介され、その後、ヒマチャル、ガルワール、ザンスカールを中心に、スライドで地域の名山を紹介された。

最後にH A J山森欣一理事長から、H A Jが毎年開催している「インド・ヒマラヤ会議」、「中国登山研究会」、「高所登山 事故と環境対策研修会」について、昨今の登山者の情勢から、来年からは「地域分科会」と「事故と環境」を組み合わせた会議に編成替えし、1泊2日程度の日程で実施するよう検討中であることが紹介された。

これで予定の会議日程を終了し、閉会となった。

過去22年間の日本隊の入山と遭難の推移 ※1994年以降は把握できたもののみ。



2002年日本隊

	山名	標高(m)	国	登山隊名/派遣母体	ルート	季	隊長	数	略	備考
1	パドマナブ	7030	イ	日本山岳会/インド	南稜	夏	坂井広志	5	○	7/6に2名が初登頂。
2	トレイサ・ガール	6904	イ	東京ヒマラヤ同人	西稜	春	川崎浩史	2	×	6/18に6000mを最高点に敗退。
3	ディオ・ティバ	6001	イ	登稜会	南面	秋	有川博章	6	○	10/2に5名がガイドとHP5名と共に登頂。

インド・ヒマラヤ登山手続き概略

1. 登山申請

登山隊は直接インド登山財団 (IMF) に申請する事が出来る。この場合の方法も手紙、FAX、Eメールなどの方法から選択する事ができる。

インド登山財団(IMF)連絡先

The Honorary Secretary,
 Indian Mountaineering Foundation,
 Benito Juarez Road,
 New Delhi 110 021,
 INDIA
 Phone: 91-11-4671211,4677935,4671572,
 Fax: 91-11-6883412
 E-mail: indmount@de12.vsnl.net.in
Indmount@vsnl.com
 Web site: <http://www.indmount.com>

また登山申請用紙などの必要な書類の書式は上記のIMFのホームページから取得する事ができる。インド登山の最大の特徴は、許可の取得、支払いなどにE-mailやクレジットカードを最大限に活用できることにある。

2. 仮登山申請

これは希望する山が、希望する時期に空いているかを確認し、空いていれば予約 (Booking) をお願いする申請である。IMFは同ルートに登山隊が複数入山する事を許していない。これはネパール、中国、パキスタンなどより登山する側に立った考えである。オープンピークのうちいくつかの有名峰は、人気が高いので早めに申請しないと希望する時期に登山できないことがある。

申請書の記入事項は

①登山隊名及び国籍

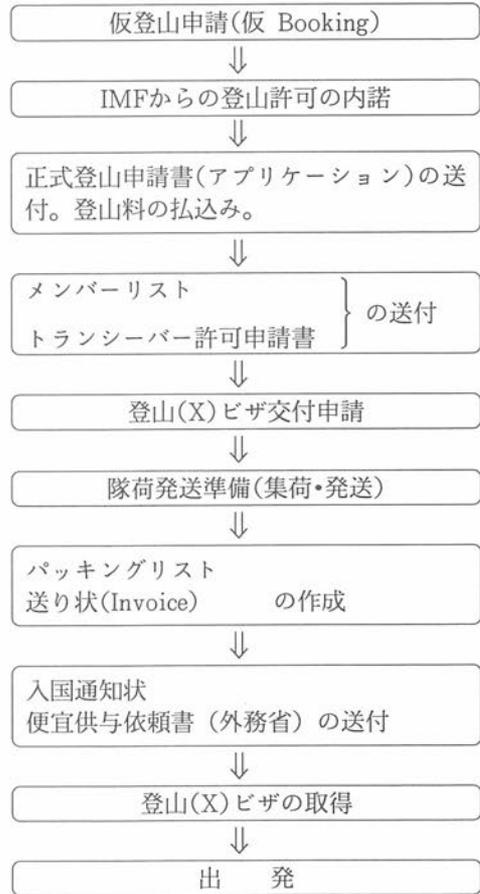
②目標の山と標高及び経度と緯度

申請峰が競合する場合もあるので、第2希望まで記しておくのが望ましい。

③経度と緯度を明示したアプローチ図及びルート概念図。

どの稜、どの壁を登りたいのか明記のこと。様々な地図から転載するのは構わないが、国境未確定エリアについては十分に注意した方がよい。ビザ取得の遅延の原因になる可能性がある。

インド登山手続きの流れ



④遠征期間

- a) インド入国から出国までのおよその日程。
- b) ベースキャンプ到着から撤収までの実質の登山期間。

⑤隊長並びにメンバーリスト

氏名、父親名 (死亡の場合も記入)、国籍、現住所、本籍、電話番号、FAX番号、年齢ならびに生年月日、職業、パスポート番号、並びに発行地および取得年月日。最近親者並びに続柄および住所 (緊急時の連絡の為)、過去1年以内の訪印の年月日ならびに訪印場所。登山トレッキングの経験。自衛隊、警察、政府関係の職務についているかどうかなどを記載する。(資料 BIO-DATA参照)

⑥登山隊の派遣母体名と日本国内の連絡先。

以上を記載した申請書に簡単な願い状を添えてIMFに送付する。だいたい一ヶ月位でIMFから登山許可の内諾書と申請用紙が送られてくる。尚、これらの手続きは、前述したとおり現在FAXもしくはEメールでも可能である。

2000年の状況では、ホームページからの各書式の取得、並びにEメール・FAXでのやり取りはスムーズに進んでいる。

3. 正式登山申請

IMFから送られてきた申請用紙に必要事項を記入し、申請書、誓約書のそれぞれの箇所に隊長のサインをする。

記入する事項は、仮申請書と同様の事項の他に、事故などの際、その処理費用をまかなう各隊員の6千ドルまでカバーする保険加入に関する証明、ヴィザを申請、受領するインド大使館、領事館名の住所ならびにファックス番号。トランシーバー携行の有無、あるいはIMFからのレンタル申し込むかどうか、インド国内のエージェントの利用。IMFでの宿泊、装備のレンタル、トランスポートのアレンジなど、IMFへの要請がある場合には詳細に記すこと。

尚、登山料は従来とことなり、正式登山申請と一緒に送付することになった。内諾書の発効日から2ヶ月以内に登山料が支払われない場合には登山許可が取り消され、他隊から申請が出ている場合には、次の登山隊に許可がまわされてしまうので注意したい。

正式登山申請用紙と一緒に送付するのは以下のとおり。尚、送金とそれに関連しては次項に記す。

- a) アプローチおよびルート概念図（8部）
- b) 日程表（8部）
- c) 写真を添付したメンバーリスト（8部）
（BIO-DATA）
- d) 登山料
- e) 環境税（400ドル）
- f) 連絡官装備貸し出し料（500ドル）
- g) トランシーバー貸出しを望む場合にはレンタル料

4. 登山料

IMFから登山許可の内諾書が送られてきたら、その発行日に注意しなくてはならない、登山料の

払込の期限が、その通知の発行日から2ヶ月以内と定められているからだ。

もしも2ヶ月以内に登山料が払いこまれない場合には、仮許可は取り消され、人気のある山の場合には、ほかの登山隊に許可がおりてしまう。また、予約した後に、登山隊の都合で登山をやめた場合には、登山料の25%をIMFに支払わなければならない。

《登山料》

東部カラコルムの山	4000ドル
制限地域の山	4000ドル
ヌン&クン	3000ドル
7001m以上の山	3000ドル
6501m～7000mの山	2000ドル
6500m以下の山	1500ドル

登山料を図に記したが以下の制限、並びに例外がある。

a) 隊員数制限

表の料金は東部カラコルムをのぞいて隊員数12人までの料金である。13人目からは一人につき300ドルが追加され、隊員数は最大16名まで。

東部カラコルムはインドとの合同隊でなければ許可が下りない。最大の隊員数16人は変わらないので、この半分の8人が最大の隊員数。

現在単独での登山は許可が下りない。

b) シッキム

シッキムで登山を行う場合には、上記登山料に、さらに下記の登山料を支払う。尚、目標の山が未踏の場合には、追加登山料はさらに倍になる。

シッキム追加登山料

高度	登山料
8001m以上の山	8000ドル
7501m～8000mの山	3000ドル
7500m～7001mの山	3000ドル
6501m～7000mの山	2000ドル
6500m以下の山	1500ドル

一時廃止されたトレッキング・ピークが1999年から下記のとおり復活した。

ストック・カンリ6153m	ラダック
ハヌマン5316m	UP
ラダキー5342m	HP
フレンドシップ5289m	HP

これらのピークは登山料300ドル。けれども連絡官と、X ヴィザの取得が義務づけられたために正規の登山隊とあまり変わらない環境になってしまった。

d) その他

インド登山では、主目標以外の山に登ろうとする場合、同じBCから登山をする場合に限り2つめのピークから登山料は半額となる。

登山期間の制限もあるので注意すること。

また、トレッキング・ピーク以外のピークでは環境税として400ドルが徴収される。

5. 登山料他の支払い

これまで紹介した料金は、バンク・ドラフトか銀行送金、あるいはクレジット・カード（ヴィサまたはマスター）でIMFに支払うことになる。IMFは現金や小切手での送金を受け付けていない。バンク・ドラフトの場合はニューデリーに支店のある銀行であればどの銀行でも良いが、送付先をインド登山財団とする。

銀行送金の場合、IMFの口座番号は下記のとおり。送金した後、隊長名、国、山名などを明記して、送金票のコピーをIMFに送ることを忘れてはいけない。

No OIS-AP-11414-00, ANZ Grindlays Bank,
Marcha Marg, New Delhi

6. ヴィザの申請

登山隊でインドに入国するさいは、X ヴィザ（登山ヴィザ）を取得しなければならない。このヴィザは観光ヴィザとことなり、在日インド大使館や領事館で申請用紙に必要な事項を記入すると、その書類はインド本国に照会され、本国のOKが出てヴィザ交付となる。したがって交付には1～3ヶ月という時間がかかる。出発から逆算し、十分余裕をもってヴィザ申請をしたい。

ヴィザ申請時に、メンバー・リストがIMFに届いていないと、インド本国での照会がおくれてヴィザ交付が遅れる。また、申請書類などの記載事項に不備があった場合にも交付が遅れるので注意したい。

ヴィザ申請に必要な書類。

- a) ヴィザ交付申請書 ——
 - i 記入はタイプ打ち。（ワープロ切り貼り）
 - ii 職業欄には会社名、所在地、電話番号を明記する。
 - iii 渡航欄にはこれまで訪れた場所を、年月日を新しいものから記入。
 - iv サインはパスポートと同じサインを3部とも自筆とする。
- b) 顔写真（パスポートサイズ） —— 3部
 - i 裏面にローマ字でサインをして申請書の左上に張る。
- c) IMFからの登山許可書のコピー —— 3部
- d) IMFからの登山料払込領収書のコピー（領収書が送られてこない場合、送金した際のコピーでも可） —— 3部
- e) 派遣母体の領収書（Certificate） — 3部
- f) 登山計画書（英文） —— 3部
 - i アプリケーションのコピーで可。（メンバーリストと地図を添付したもの）
- g) 隊員のパスポート（残存期間6ヶ月以上）

7. 外務省、日本大使館への届出

インド・ヒマラヤの登山の場合、登山許可の取得に（社）日本山岳協会の推薦状は必要としない。したがって外務省、在インド大使館などに書類をだす義務はないが、ご存知のように、高所登山の場合には2%をこえる遭難死亡率が教えてくれるとおりに、安全な登山などありえない現実がある。もしもの時にはお世話になる外務省へは登山計画書他の書類を提出しておくことが望ましい。

外務省提出書類

- a) 和文計画書 1部
 - b) 英文アプリケーションコピー 1部
 - c) 願い書（関係諸機関に対する便宜供与依頼書）
オリジナル1部
 - d) 念書（登山隊にかんする一切の責任を負う旨を誓約する念書） オリジナル1部
- 尚、在インド大使館への書類送付の必要はなくなった。

8. 隊荷の輸送

インド・ヒマラヤは、標高があまり高くなく、道路などの交通施設も整備されている山が多く、登山期間が短くすむために、日本からの持ち出し装備も多くなく、多少の超過料金を支払っても手荷物で輸送するのがほとんどである。ここでは、インドの特殊事情もふくめて旅行者手荷物別送品(Un-accompanied Baggage 通称「アナカン」)として隊荷を輸送した場合について、これまでの経過も踏まえて紹介する。

・通関

インドで登山を行なう場合、隊荷の通関は、多くの労力と時間、パワーが要求される、私たちが現地に行って最初に出会う「インド」であり、越えなければならないハードルである。

外国人がインドで登山を行なう場合、登山用の装備は6ヶ月以内の再輸出を条件に無税で通関、輸入できると登山規則に規定されている。

・隊荷の発送

アナカンは旅行者手荷物の別送品ということで、通常の航空貨物料金の半額で荷物を送ることができ、よほどの大登山隊でなければ、この方法で隊荷を輸送することが多い。デリー空港までの経路にはいくつかあり、それによって輸送にかかる日数がちがう。委託する業者とよく相談のうえ日本からの発送日を決める。そうしないとインドでの隊荷の保管料が多くかかってしまう。国内での隊荷の集荷、並びに梱包、パッキングリストを作成して発送日に間に合うように業者にわたす。

ところが1996年、インドの国内の法律改正により、個人の輸入に対する制限が厳しくなった。その後の登山隊の「アナカン」による隊荷の輸入は、最新の情報を元に、エージェントとよく相談の上行う必要がある。入山前の無用なトラブル・消耗はできるだけ避けるのが賢明である。

関係諸機関の連絡先

1. 外務省

外務大臣官房 文化交流部 人物交流課
〒105-8519 東京都港区芝公園 2-11-1
Tel 03-3580-3311 内線 2873

※願い書の宛名 外務大臣官房文化交流部長

2. 在日インド大使館 (Embassy of India)
〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-2-11
Tel 03-3262-2391/4 Fax 03-3234-4866
3. 在日インド総領事館
(Consulate General of India)
〒651-0084 兵庫県神戸市中央区磯辺通 4-1-8 ITCビル 8階 TEL 078-241-8116/7
4. インド政府観光局東京案内所
(Government of India Tourist Office)
〒104-0061 東京都中央区銀座 7-9-18 パールビル
Tel 03-3571-5062/3 Fax 03-3571-5235
5. インド航空 (Air India)
〒100-0006 東京都千代田区有楽町 1-8-1 日比谷パークビル 6階
Tel 03-3241-7633(旅客) 03-3214-1981(予約)
Fax 03-3214-0080
6. 在インド日本大使館 (Embassy of Japan)
50-G, Chanakyapuri, New Delhi 1110 021 INDIA
Tel 91-11-6876564, 6876581~3
Fax 91-11-6885587
特命全権大使 平林 博 (2002.1 確認)
7. インド登山財団
(Indian Mountaineering Foundation)
Benito Juarez Road, New Delhi 110 21 INDIA
Tel 91-11-4671211, 4677935
Fax 91-11-6883412
E-mail: indmount@12.vsnl.net.in
Indmount@vsnl.com
Web Site: <http://www.indmount.com>
8. 旅行会社等 (航空券・アナカン等)
(株) ティ・エッチ・アイ
〒135-0042 東京都江東区木場 2-5-7 KHビル 7F
TEL 03-5245-0511 Fax 5245-0510
(株) 西遊旅行
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-3-1 岩波書店アネックス 5F TEL 03-3237-1391

2002年インド・ヒマラヤ外国隊許可リスト

Jos	山名	標高	期間	国	隊長
1	Jaonli	6632	25May - 15Jun	イギリス	○ Mr.Oliver Clayton
2	Satopanth	7075	20Sep - 20Oct	オランダ	Mr.Jos Smeets
3	Stok Kangri	6153	26May - 30Apr	イギリス	○ Mr.Ross Brent Cooper
4	Changabang	6866	15Apr - 25Jun	ニュージーランド	× Mr.David Vass
5	Unnamed	6175	1 May - 1 Jun	アイルランド	○ Dr.Roger Mamorrow
6	Unnamed	5850	25Apr - 1 Jun	イギリス	○ Mr.Martin Moran
7	Theley Sagar	6904	20May - 5 July	日本	× 川崎浩史
8	Padomanabh	7030	9 May - 8 July	インド/日本	○ H・カップディア/坂井広志
9	Kedar Dome	6830	6 May - 12Jun	フランス	× Mr.Solignac Francois
10	Arwa Tower	6352	24Apr - 25May	フランス	○ Mr.De Choudens Antoine
	Arwa Spire	6193			
11	Chaukamba- I	7138	14July - 31Agu	韓国	× Mr.Man Jae Lim
	Chaukamba- II	6974			
12	Arwa Spire	6193	1 May - 15Jun	スイス	○ Mr.Bruno Hasler
13	Janhukuth	6805	12May - 6July	オーストリア	× Mr.Jochler Jowsef
14	Arwa Toewr	6352	12Sep - 30Oct	スイス	Mr.Roux Frederic
15	Kedar Dome	6830	21Aug - 19Sep	韓国	Mr.Jin Sun Ryo
16	Shivling	6543	17Aug - 15Sep	ウクライナ	× Mr.Gry Shchenko Victor
17	Shivling	6543	7 Sep - 6 Oct	オーストリア	× Mr.Jordi Massalle
18	Shivling	6543	28Aug - 26Sep	スペイン	
19	Suitilla	6373	7 Sep - 13Oct	インド/イギリス	Parammjeet Singh/Graham Little
20	Swachhand	6721	1 Sep - 29Oct	カナダ	Mr.Guy Meredith Edwards
	Meru Shark Fin	6450			
21	Deo Tibba	6001	1 Sep - 13Oct	日本	○ 有川博章
22	Hanuman Tibba I	5932	30Jun - 20jul	韓国	Mr.Kim Keun
	Ladakhi	5345			
23	Unnamed	6107	1 Aug - 31Aug	ポーランド	× Mr.Andrej Zbinshki
24	Meru Shark Fin	6450	2 Sep - 11Oct	イギリス	Mr.Julian Charles
25	Shivling	6543	12Sep - 18Oct	スイス	Mr.Walter Hungerbulher
26	Bhrigupanth	6772	28Jul - 13Aug	韓国	○ Mr.Woo Suk
27	Chaukanba II	7068	7 Sep - 10Oct	フランス	Mr.Wagon Patrik
28	Changabang	6866	7 Sep - 24Oct	ドイツ	Mr.Jan Mersch
	Purbi Dunagiri	6523			
29	Shivling	6543	7 Sep - 14Oct	イスラエル	Mr.Kagan Ran
30	Little Kailash	6321	19Sep - 14Oct	インド=イギリス	Mr.Martin Moran
31	Shivling	6543	15Sep - 14Oct	ハンガリー	Mr.Csaba Toth
32	Nepal	7168	13Sep - 30Oct	ドイツ	○ Mr.Hervert Sreibel
33	Meru	6660	15Sep - 15Nov	スペイン	Mr.Jorge Corminas Garica
34	Kedarnath	6968	21Sep - 13Oct	イタリア	Mr.Moretti Martino
35	Satopanth	7075	15Sep - 15Oct	スロベニア=インド	Mr.Suraj Dalal

パキスタン登山隊リスト2002年

	山名	国名	隊長名	人数	登山期間	結果
1	ガッシャーブルムⅡ	オーストリア	Wolfgang Fuchs/Mr.	10		中止
2		イギリス	David W.Hamilton/Mr.	7		中止
3		日本	近藤和美	6	5月21日から 8月27日まで	不
4		韓国	Yoo Gae III/Mr.	6	6月15日から 8月7日まで	不
5	ガッシャーブルムⅠ	スイス	Andre Georges/Mr.	9	5月18日から 7月11日まで	不
6		スペイン	Oscar Cadiach I. Puig/Mr.	4	5月29日から 8月8日まで	不
7		日本	岩崎 洋	4	6月11日から 8月28日まで	登頂
8	ガッシャーブルムⅣ	スイス・イタリア	Casella Mario/Mr.	7	5月31日から 7月25日まで	不
9	ブロード・ピーク	スペイン	Sebastian Alvaro Lomba/Mr.	7		この冬登山予定
10		スイス	Andre Georges/Mr.	5	5月18日から 7月11日まで	不
11		ドイツ	Robert Rackl/Mr.	18	6月11日から 7月27日まで	不
12		韓国	Han Wang Youg/Mr.	7	6月22日から 8月5日まで	不
13		スペイン	Carlos Soria Fontan/Mr.	7	6月4日から 8月3日まで	不
14		イギリス	Hanry Todd/Mr.	13	6月4日から 8月3日まで	不
15	K-2	ルーマニア	Bogdan Mihnea Cuibus/Mr.	2		中止
16		スペイン・メキシコ	Araceli Segarra Roca/Mr.	6	6月7日から 8月24日まで	不
17		スペイン	Jordi Tosas Robert/Mr.	5	5月24日から 7月24日まで	不
18		日本	近藤和美	6	5月21日から 8月27日まで	
19		スペイン	Luis Franga/Mr.	4	6月10日から 8月6日まで	不・HP1名死亡
20		イギリス	Henry Todd/Mr.	13	6月4日から 8月30日まで	不
21		中国・パキスタン	Sangzhu(Sam Drug)/Mr.	12	5月21日から 8月9日まで	不・パキ 隊員 が1名死亡
22		スペイン	Oscar Cadiach I Puig/Mr.	4	5月29日から 8月8日まで	不
23	スペイン	Carlos Suarez Mosquera/Mr.	7	6月4日から 8月3日まで	不	
24	スパンティーク	日本	菅原長久	4		中止

	山名	国名	隊長名	隊員数	登山期間	結果
25		イギリス	David W.Hamilton/Mr.	7		中止
26		パキスタン・スペイン	Victor Suanzez/Mr.	7		中止
27		日本	大宮 求	7	7月30日から 8月30日まで	登頂
28		フランス	Trommsdoff Christian/Mr.	8	7月6日から 8月5日まで	登頂
29		日本	モリ ハツヨシ	2	8月16日から 9月12日まで	登頂・1名死亡
30	ナンガ・パルバット	スペイン	Luis Cortabitarte/Mr.	6	6月4日から 7月24日まで	不
31		日本・パキスタン	細田 一郎	2	7月22日から 8月22日まで	不
32	チョゴリザ	日本	岩崎 洋	4	6月11日から 8月28日まで	不
33	バルトロ・カンリⅢ	日本	岩崎 洋	4		許可下りず
34	ドゥルフィカ	イギリス	David W.Hamilton/Mr.	7		中止
35	ムスタグ・タワー	ポーランド	Maciej Sokolowski/Mr.	7		中止
36	バツラ・ムスターグ	ドイツ	Walter Hannes Markus/Mr.	7	6月24日から 7月24日まで	不
37	ユトマル・サール	アメリカ・ロシア	Lev Loffe/Mr.	6		中止
38	チャンギ	オーストリア	Edi Koblmuller/Mr.	8		中止
39	無名峰 (7010M)	日本	亀井 正	7	7月2日から 8月7日まで	不
40		パキスタン	Hasil Shah/Mr.	13	9月26日から 10月18日まで	登頂

パキスタン首相と連邦大臣名簿 (2002年11月23日就任)

国防担当上席大臣 ラオ・シカンダル・イクバル (PPPP愛国者)

外務・法務・人権担当相 ミヤーン・フルシード・マフムード・カスリー (PML-Q)

内務・麻薬問題相 サイヤド・アイサール・サーレ・ハヤート (PPPP愛国者)

商業相 フマユーン・アフタール・ハーン (PML-Q) 情報相 シェイフ・ラシード (PML-Q)

食糧・農業相 サルダール・ヤール・モハンマド・リンド (NA)

労働・在外パキスタン人担当相 アブドゥル・サッタール・ラーレカ (PML-Q)

石油・天然資源相 チョードリー・ノーレイズ・シュクル・ハーン (PPPP愛国相)

水利・電力相 アーフタターブ・アフマド・ハーン・シェルパオ (PPPシェルパオ派)

I T・通信相 ウェイス・アフマド・ハーン・レーガリー (NA)

産業・生産相 リヤーカット・アリー・ジャトーイー (PML-Q)

教育相 ゴベイダ・ジャラル (PML-Q) 保健相 ムハンマド・ナシール・ハーン (PML-Q)

鉄道相 ゴウス・バフシ・ハーン・メヘル (PML-Q)

首相 ミール・ザファルッラー・ハーン・ジャマリー (1944年1月1日生まれ バローチスターン)

ネパール山岳協会が扱う、トレッキング許可ピーク、区分と新ルールについて

以前、ネパールの許可峰は4つのカテゴリーに分けられ、その多くのピークがネパール観光省に申請し許可の発行を受けるのに対し、NMA（ネパール山岳協会）が登山許可発行を委託する形を取っている、いわゆるトレッキング許可ピークが18座あり、これらピークは、許可申請等が簡略化されている為人気をあっめていた。さて、2年前より新たなピークが解禁となったがそれにともない新たに15座がトレッキング許可ピークとして加えられた。これら新旧合わせた33座は以前からのピーク（グループB）と新たに追加されたピーク（グループA）に区分され登山料などが異なる。又、ゴミ処理供託金の支払いが義務づけられた。

ネパール山岳協会が扱うピーク

Group 'A'

1.Cholatse(6440m)	Khumbu
2.Mt.Machermo(6273m)	Mahalangur
3.Mt.Kyazo Ri(6186m)	Mahalangur
4.Mt.Phari Lapcha(6017m)	Mahalangur
5.Mt.Nirekha(6159m)	Mahalangur
6.Mt.Langsisa Ri(6427m)	Jugal
7.Mt.Ombigaichen(6340m)	Mahalangur
8.Mt.Bokta(6143m)	Kanchenjunga
9.Mt.Chekigo(6257m)	Gaurishankar
10.Mt.Lobuje West(6145m)	Khumbu
11.Mt.Larkya Peak(6010m)	Manaslu
12.Mt.ABI(6097m)	Mahalangur
13.Mt.Yubra Himal(6035m)	Langtang Himal
14.Mt.Chhukung Ri(5550m)	Khumbu
15.Mt.Yala Peak(5732m)	Langtang Himal

Group 'B'

1.Hiunchuli(6441m)	Annapuruna
2.Singu Churi (Fluted Peak6510m)	Annapuruna
3.Mera Peak(6458m)	Khumbu
4.Kusm Kangru(6367m)	Khumbu
5.Kwangde(6011m)	Khumbu

6.Chulu West(6419m)	Manang
7.Chulu East(6584m)	Manang
8.Imja Tse(Island Peak 6190m)	Khumbu
9.Parchamo(6187m)	Rolwaling
10.Lobuje East(6119m)	Khumbu
11.Ramdung(5925m)	Rolwaling
12.Pisang Peak(6091m)	Manang
13.Tahrpu Chuli(Tent Peak 5663m)	Annapuruna
14.Khongma Tse(Mehra 5849m)	Khumbu
15.Ganjara Chuli(Naya Kanga 5844m)	Langtang
16.Pokhalde(5806m)	Khumubu
17.Mardi Himal(5587m)	Annapuruna
18.Paldor Peak(5869m)	Langtang

各グループ別登山料と人数制限

グループ 'A'

7人までで500\$。一人追加ごとに100\$。

グループ 'B'

1-4人 350\$

5-8人 350\$に一人あたり40\$が追加

9-12人 510\$に一人あたり25\$追加

※両グループ共一隊最大12人までとし、それを越える場合新たに隊を構成する事となる。

ゴミ処理供託金

これら33のピークは、NMAに申請時にゴミ処理供託金として250\$をデポする。登山終了後、指定されたゴミ処理が行われ、その旨のレポートを提出した後返金される。

NMA（ネパール山岳協会）

E-MAIL : office@nma.com.np

Website : www.nma.com.np

(文責：野沢井 歩)

地域ニュース

《ネパール》

イムジャ・ツェ(6,190m)で遭難

イムジャ・ツェ(アイランド・ピーク)を目指していた近藤和美(61)、榊原仁司(55)の2名は、1月5日、登頂に成功したが、下山中に榊原隊員が滑落死亡した。

トピックス

HAJ常務理事会報告

現在「ヒマラヤ」の印刷を引き受けている中坪印刷が、本年4月号をもって廃業のため、その対策を協議することを主な目的に招集された。

1. 日時：2003年1月25日(土)18時～19時
2. 場所：HAJルーム
3. 出席者：山森欣一理事長、野沢井歩専務理事、岩崎洋、中川裕、睦好正治各常務理事。
(尚、八木原罔明、古関正雄常務理事は会議終了後到着。)

4. 議題：

4-1) 印刷会社の決定

4社から見積りが提出されたが、最低価格の釣巻印刷(株)に発注することに決定。

4-2) その他の決定事項

平成15年度の「高所登山 事故と環境対策 研修会」は中止とする。次年度以降「インド・ヒマラヤ会議、中国登山研究会、事故対を統廃合して、新たに「地域研と事故対」を組み合わせた1泊2日の会議を検討する。毎年の通常会員総会終了後に「ヒマラヤ編集会議」を開催する。HAJのホームページの開設を検討する。

山野井泰史氏に朝日スポーツ賞

昨秋、ギャチュン・カン(7,952m)北壁(中国側)に挑戦し、登頂したものの下降中、雪崩などにより重度の凍傷を負った山野井泰史(37)氏に、朝日

新聞社制定の「朝日スポーツ賞」が授与された。

受賞式に出席した氏は「クライミングは大変危険な行為です。ぼく自身何度もけがをしたし、多くの友人を亡くしている。しかし、人間の潜在能力を発揮するには最高の手段です」と語った。

「第24回 高所順応研究会」の開催

- *主催：東京都山岳連盟・海外委員会
- *日時：2003年3月1日(土)9:00～17:00
- *場所：国立オリンピック青少年総合センター
小田急線参宮橋下車 徒歩5分
- *参加費：3000円(昼食は各自でお願い致します)
- *申し込み方法：参加申し込み書に参加費を添えて都岳連事務局まで現金書留で送付して下さい/ FAXでも受け付けます。

*申し込み・問い合わせ：

〒104-0031 東京都中央区京橋1-9-9
湘南産業八重洲ビル401 東京都山岳連盟
事務局(月曜～金曜、午後1時～5時)
TEL 03-5524-5231 FAX 03-5624-5232

*研究会内容(予定)：

- : 高所順応の基礎知識(古谷朋之氏)
- : 高所障害の実例と対処(塩田純一 Dr.)
- : 高所登山の実際
日中合同チョー・オユー隊(橋本しをり先生)
HAJカラコルム隊(野沢井 歩氏)
- : 脳血栓症例について(塩田先生、橋本先生)
- : 質疑応答、

■創立35周年記念行事支援金

- {1万円} 佐藤光由、村井龍一、森田千里、
彌野光一 {八千円} 三笠美喜夫

東京集会のお知らせ

日時	2月24日(月)午後7時～
内容	
場所	HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

TIBET TREK

神秘の地チベットへ、幻の花「ブルーポピー」を見に行こう！

H A J ニンチン・カンサ トレッキング隊員募集

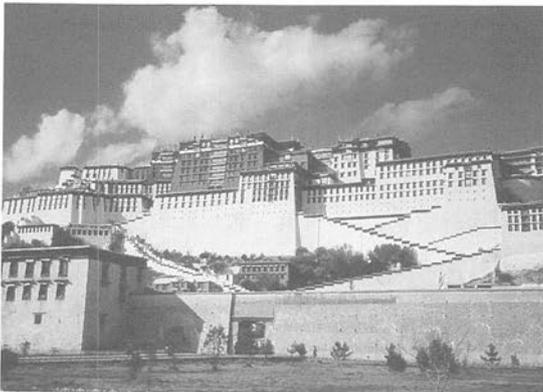
H A J がこれまで過去4回サマーキャンプを実施したニンチン・カンサBCへのトレッキングです。ラ薩（ラサ）の街を俯瞰したり、チベット仏教の聖なる湖ヤムドクツォを展望し、夏の高原をトレックしながら幻の花ブルーポピーや咲き乱れる小さく可憐な花々との出会いを楽しみます。

記

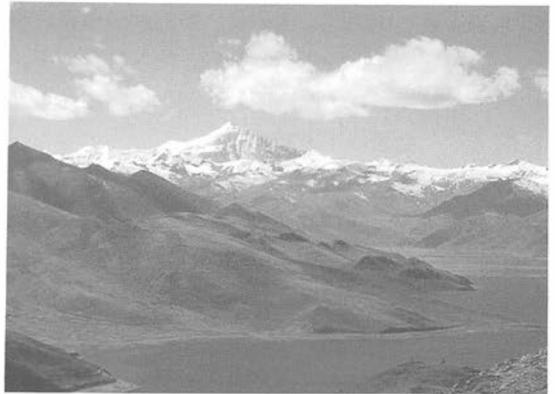
- 料金：395,000円
- 募集人員：15名限定（最少催行人員10名）
定員になり次第〆切
- H A J のツアーリーダー同行
- 食事：朝11回、昼11回、夕12回
- 利用ホテル：成都：岷山飯店、拉薩：拉薩飯店。
又は同等クラス
- 利用予定航空会社：中国国際航空
- 問い合わせ先：H A J 事務局



▲ブンバ・リ（4200m）より拉薩



▲拉薩・ポタラ宮



▲カンパ・ラよりニンチン・カンサ



▲ニンチン・カンサ西面H A J ・BCより望む、ニンチン・カンサ（7,206m）



▲ニンチン・カンサBCに咲くブルーポピー



▲チベット高原に住むヤク

	月・日	都市名	交通機関	摘要
1	7月18日 (金)	成田～成都	C A 452	空路、四川省の成都へ。〈成都／ホテル〉
2	7月19日 (土)	成都～拉薩	C A 4401	空路、チベット自治区の中心地拉薩へ。〈拉薩／ホテル〉
3	7月20日 (日)	拉薩	専用車	終日、ポタラ宮、大昭寺、八角街などの観光。〈拉薩／ホテル〉
4	7月21日 (月)	拉薩	トレッキング	拉薩近郊のブンバ・リ(4200m)登山で高所順応。〈拉薩／ホテル〉
5	7月22日 (火)	拉薩～ランカーズ	専用車	専用車にてランカーズへ。天候が良ければ、途中のカンパ・ラからは青く美しいヤムドク・ツォやニンチン・カンサの雄大な景色が眺められます。〈ランカーズ／招待所〉
6	7月23日 (水)	ランカーズ	トレッキング	高所順応を兼ね4700m付近までのトレッキング。〈ランカーズ／招待所〉
7	7月24日 (木)	ランカーズ	トレッキング	高所順応を兼ね5000m付近までのトレッキング。〈ランカーズ／招待所〉
8	7月25日 (金)	ランカーズ～マヨン村～ニンチン・カンサBC	専用車、トレッキング	専用車にてカロ・ラ(5045m)を越え、マヨン村へ。マヨン村からニンチン・カンサBCまでのトレッキング(約3時間)。〈ニンチン・カンサBC／テント泊〉
9	7月26日 (土)	ニンチン・カンサBC	トレッキング	ニンチン・カンサBC付近のトレッキングとブルーポピーなどの高山植物の観察。〈BC／テント泊〉
10	7月27日 (日)	ニンチン・カンサBC～マヨン村～拉	トレッキング、専用車	往路を拉薩まで戻ります。〈拉薩／ホテル泊〉
11	7月28日 (月)	拉薩～成都	C A 4402	国内線にて成都へ戻ります。〈成都／ホテル泊〉
12	7月29日 (火)	成都	専用車	終日、成都市内観光とショッピング。〈成都／ホテル泊〉
13	7月30日 (水)	成都～成田	C A 451	空路帰国の徒へ。到着後解散。

H A J 販売書籍案内

書 名	価 格	送 料
1. 雪の住処35年の記録	3, 500円	(450円)
2. 天壇の山に挑む (ミニヤ・コンカ1991年隊)	2, 500円	(310円)
3. 勇者よ永遠に、ナンガ・パルバット (1984年隊事故報告)	1, 500円	(240円)
4. 千人の悪魔の峰、マモストーン・カンリ (1984年隊)	1, 000円	(240円)
5. 烈風の彼方へ、冬期マナスル (1982年隊)	1, 500円	(240円)
6. ナンダ・カート (1981年隊事故報告)	2, 000円	(340円)
7. 聖地巡礼の旅 (サトパント1990年隊)	2, 000円	(240円)
8. “神の河”ブラマプトラの激流を下る (1990~1991年)	2, 500円	(240円)
9. 知られざる北部シッキムの山々	2, 000円	(240円)
10. 東部カラコルム	2, 000円	(240円)
11. ナマステ、サラスワティ (1992年隊)	2, 000円	(310円)
12. 崑崙の頂を踏む、青海・玉珠峰 (1993年隊)	1, 000円	(240円)
13. 天女の山 (玉虚峰) (1994年隊)	1, 000円	(240円)
14. ヒマラヤ、そして仲間達へ (ケダルナート・ドーム1980年隊)	1, 500円	(310円)
15. ルンポ・カンリ (1994年隊)	1, 500円	(240円)
16. 中国登山の手引き (第5版)	3, 000円	(340円)
17. ニンチン・カンサ (1997年隊)	1, 600円	(210円)

■ 寸 感 ■

昨夏のスパンティック遭難事故には、同じヒマラヤを目指す者として考えさせられた。一刻も早く「海外登山情報センター」の開設が望まれる。(山)

事 務 局 日 誌 (1月)

- 6日(月) 仕事始め
- 8日(水) TMA (DOU) 招へい状送付
- 10日(金) ヒマラヤ375号発送
カンペンチン登山申請書/トンジャンジャブー偵察申請書CMAへ発送
- 11日(土) 会費未納者31名へ督促状発送
- 16日(木) TMA (DOU) 招へい状再発行
山岳文化学会協議 (山森)
- 18日(土) 日本山岳協会新年会 (ガーデンパレス (山森))
- 22日(水) 国際山岳年日本委員会 (麴町スクワール、山森)
- 25日(土) 常務理事会 (於ルーム、18時~19時)

- 26日(日) 山森、野沢井、岩崎、中川、睦好
第24回インド・ヒマラヤ会議 (豊島区民センター、40名)
- 27日(月) 東京集会 (11) 名
ニマ・ツェリン大阪集会
- 28日(火) 白川義員猪突猛進会 (山森、八木原、尾形)
- 29日(水) ニマ・ツェリン京都集会
- 31日(金) ニマ・ツェリン歓迎会 (於、池袋)
山森、尾形、中川、田中、山森(美)

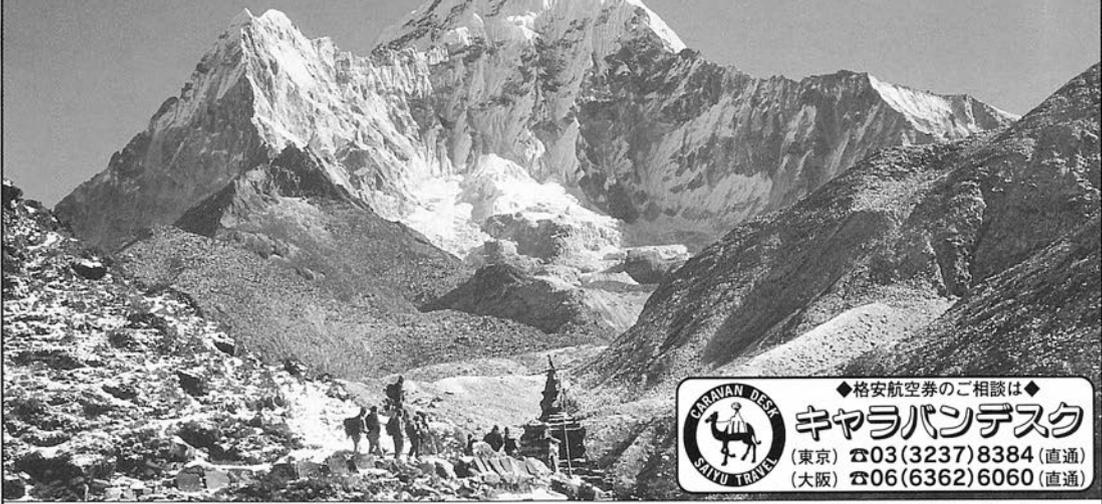
ヒマラヤ No.376 (3月号)

平成15年2月10日印刷 15年3月1日発行
 発行人 山森欣一
 編集人 山森欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆
キャロパングスク
 (東京) ☎03(3237)8384 (直通)
 (大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア ■本社 / 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
 岩波書店アネックス5F
 ☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
 ■大阪営業所 / 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F
 ☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
 国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員
 西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp) お問い合わせ・お申し込みにはフリーダイヤル ☎0120-811395 (通話料無料) をご利用下さい。

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13
 TEL: (03) 3740-2674 (直)
 http://www.tokyo-np.co.jp/

最新
クライミング技術
 ジムクライミングのフリークライミングからルンヂクライミング、アルパイン、ロッククライミングまで、すべてのロッククライマーに必須の書。ひとりの技術を単なるニッチルとしてではなく、その意味や実践までを深く詳しく解説。実践的なクライミングのポイント、心構えなども細かくアドバイス。
 菊地敏之 著
 1600円

山小屋の主人の炉端語
 著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る人話の取っ置きのお話。
 工藤隆雄 著
 1500円

すぐ役立つ 山の花学
 「飛騨高山の花博士」として知られる著者の、山の花術入門書。
 小野木 三郎 著
 1456円

すぐ役立つ 山の気象と救急法
 山の気象と遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。
 飯田睦治郎 著
 桜井博幸 著
 1359円

すぐ役立つ 記念日の山に登ろう
 人それぞれの記念日の日付と標高が致する山はどこと。
 石井光造 著
 1300円

北アルプス やまびと物語
 「山人」に3年余り連載した「山人探訪男達の証」に加筆、登山をより楽しむための2冊。
 柳原修一 著
 1456円

北アルプス 山小屋物語
 歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。
 柳原修一 著
 1456円

花と歴史の50山
 「花と歴史の山旅」の第2弾、花の山々を訪れた珠玉のエッセイ集。
 田中澄江 著
 1359円

改訂増補 六十歳からの日本三百名山
 60歳から13年間で三百座を踏破したスーパ―お爺さんの山行記。
 田中 三郎 著
 1456円

新・山靴の音
 遭難をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。
 芳野満彦 著
 1262円

中・高年登山 なんでも百科
 「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中・高年登山の虎の巻。
 福島 正明 著
 1500円

登山の運動生理学百科
 「いつしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒトメカなど高所登山実感を踏まえて、分かりやすくまとめた。
 山本 正嘉 著
 2000円

山書散策
 今まで数多く発行された山書向を眺めたら、よいか、そんな時の指針として、「山人」連載時から好評。
 河村 正之 著
 1500円

※本体価格に消費税が加算されます。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
- 新宿西口店/〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
- 神田登山店/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-3295-0622
- 神田本館/〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
- 八王子店/〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
- 大宮店/〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
- 高崎店/〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
- 川越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
- 甲府店/〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
- 宇都宮今泉店/〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
- 太田高林店/〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
- 松本店/〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
- 長野店/〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
- 新潟店/〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

- 新潟とやの店/〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
- 仙台店/〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
- 秋田広小路店/〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
- 盛岡大通店/〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
- 札幌店/〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
- 北十二条店/〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
- 伏古店/〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
- 平岡店/〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
- 外高部(メールオーダー係)/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004